民俗建築アーカイブ㉗　Minzoku Kenchiku Archives ㉗

佐藤重夫の広島平和記念公園設計プラン

アーカイブ委員会　古川　修文

Shigeo Sato's Plan for the Design of the Hiroshima Peace Memorial

Nobuhisa FURUKAWA

1．はじめに

広島に原爆が投下されて４年後の昭和24年、広島市は原爆の炸裂直下に近い中島地区に平和記念公園を建設し、戦死者の慰霊と平和希求の聖地を築く計画を立てた。市は昭和24年５月20日の日付で平和記念公園の設計コンペを発表した。締め切りは２か月後の７月20日で短期間に仕上げなければならない忙しい課題であったが、全国から145点の応募作品が寄せられた[1)]。審査結果は８月６日の第３回平和祭の式典で発表され、同時に入選者へ通知された。広島市役所前にも掲示され、翌日８月７日の新聞でも報道された。首席（一等）は丹下健三他３名のグループによる作品、次席（二等）は山下寿郎設計事務所、三等は荒井龍三の各氏であった。この他に佳作として５点が選ばれ、合計８点の作品が入選作品となった[2)]。首席、次席、三等の作品は『建築雑誌』（第64輯、第756号、日本建築学会、昭和24年）に審査員の一人であった岸田日出刀東大教授の審査評とともに掲載された。これがこの設計競技の入選作品を知る唯一の記事であった。佳作の５点については入選者名も作品評も『建築雑誌』に掲載されなかった。１等から３等までの建築図面が最も貴重な記録として残っている。しかし１等の丹下・他案では透視図と配置図が掲載され、２等の山下案は透視図と平面図、３等の荒井案は透視図と平面図が掲載されただけである。図面は全体計画平面図、敷地全体の鳥瞰図、建築設計図（平面図、立面図）各一葉を提出することになっているが、『建築雑誌』はどれか一葉が省略されていた。また、透視図は彩色をしてもよいことになっているが[3)]、『建築雑誌』はモノトーンの印刷であるから透視図に着色しているか否かは不明である。入選作品は主催者に帰属するが、それ以外の作品は郵送実費を払って返却してもらうことが出来た。その手続きをとらない作品は廃棄されてしまう。この設計競技は戦後史に残る重要な企画であったが、「募集要項」や「入選作品」も現物は残されておらず、コンペに関わる詳細の内容は長い間不明のままであった。ところが、資料として最も重要である「募集要項」が設計コンペ後72年過ぎた2021年夏に佐藤家で発見された[3)]。しかし入選作品の原図は主催者の広島市にもなく、応募者名簿も残っていないから入選外の応募作品を探すのも困難で、今まで多くの人がこれらの発見に努めてきたが見つからなかった。

広島市の職員であった高東博視氏は長い間コンペの資料を探してきた研究者の一人である。高東氏は広島大学建築学科で佐藤重夫教授の教えを受けた卒業生であり、卒業後は広島市都市計画局長として長年行政に携わった人である。在職の頃からコンペに関する資料を追求し、退職された今も範囲を広げて活動を続けている。高東氏の調査では入選者以外に判明した応募者は菊竹清訓（東京都）、大旗正二（広島県）、吉武長一（山口県出身）であるが設計図面はない。ところが2015年９月、偶然にも岡山の佐藤家

で佐藤が応募した設計図面が発見された。それと共に佐藤の大学時代の友人森田茂介(東京)もコンペに応募したことが分かった。この２名が追加されて合計５名が確認された。高東氏によると佐藤重夫の設計図面が現在残っているただ一つの応募作品だということである。本稿はその発見の経緯と３枚の図面について解説するものである。

２．設計図面発見の経緯

佐藤重夫は2003(平成15)年、91歳で逝去された。卒業生が集まって遺品を整理したが、著者も日本民俗建築学会会長の佐藤に久しく親炙に浴したご縁から遺品整理を手伝わせていただいた。佐藤が学生の頃から設計したA1サイズの建築図面が100点以上も残っていて、これをカメラで撮影し、デジタル化することに取り組んだ。１日では終わらない作業であったから、図面の確認はしないまま次々と撮影した。それでも相当汚れて修正不可能な図面は取り除いた。2015年９月８日のことであった。撮影作業が終わって写真整理の段階に入り、図面のタイトルと全体図を確認していったとき、１枚の図面に思わぬ衝撃を受けた。広島県産業奨励館や川の名前があって、中島地区の公園の図面であることに気が付いた。写真の左上を拡大したところ、そこには「廣島市平和記念公園及ビ記念館鳥瞰図　暗号 地」と書かれていた。「暗号 地」とは設計競技に応募した図面で、匿名の暗号を表している。「暗号 地」の図面が３枚あり、他のタイトルは「配置図　暗号 地」と「平和記念館設計図　暗号 地」であった。A1のケント紙に書かれてあり、変色して汚れてはいるが、鳥瞰図は水彩絵の具で彩色していた。この３枚の図面は佐藤がコンペに応募したものだと確信した。他のたくさんの図面の中に紛れて汚れていたが、大変な宝物を発見した思いであった。可能な限り汚れを落とした写真を高東氏に送り、現在残っている唯一の設計図面であることを確認して、大切に保存することを佐藤家にお願いした。それから６年後の2021年の夏に佐藤家で平和記念公園の「募集要項」が発見された。これによって長い間不明であった設計募集に関する詳細が明らかになってきた。「募集要項」は一級の歴史資料として貴重であり、佐藤家の理解と了承を得て広島市公文書館に寄託することになった。その折、佐藤が応募した設計図面が発見されたことが話題になり、３枚の写真を見ながらこの図面も寄託の対象として検討した。入選作品でもない個人の応募作品を公文書館に保管するのはどうかという疑問も生じたが、この図面は平和記念公園を建設した歴史的資料としての意味を持ち、しかも残っている唯一のものであるという公文書館の説明を聞き、納得した。多くの人に公開して活用していただく意義を感じ、図面の寄託を佐藤家にお願いしたところ協力してくださることになった。ただし話し合いの段階で、応募図面をスキャニングしたものを寄託することになり、公文書館とともにその準備に着手した。著者は2023年９月９日、岡山の佐藤家にスキャニングの業者と共に図面を受け取りに行ったとき全く想像していなかった新事実を発見した。そこには以前に私が写真に撮った図面ではなく、畳紙(たとうがみ)で包まれた設計図が３枚用意されていた。紙の変色もなく、汚れも少なく、しかも私が撮影したA1の図面より一回り大きいB1サイズのケント紙に描かれた図面であった。見た瞬間、本物の設計図と分かった。佐藤先生は平和記念公園の設計図面を和紙を挟んで畳紙に入れ、大切に保管していたのである。著者が写真に撮った図面の鳥瞰図はカラーであって、昭和24年当時はカラーコピーは無いはずだから本物の図面と思い込んでしまったが、これは佐藤が広島大学退官のとき他の図面と一緒にコピーしたものと想像がついた。本物の設計図のスキャニング図面を原寸の形[4)]で公文書館に寄託できたのは幸いであった。

註

1）高東博視氏の見解では応募件数は諸説ある。145点（中国新聞）、140余点（『建築雑誌』第64輯、第756号）、132点（丹下健三・KENZO TANGE）など。

2）高東博視氏の調査によると佳作（5点）は、山口和男（東京都）、杉本朝次（東京都）、河内義就、亀本次郎（広島市）、橋本文夫（東京都）、間野貞吉（東京都）（1949年8月7日中国新聞）。

3）「廣島市平和記念公園及ビ記念館設計懸賞募集要項」（『民俗建築』第162号、2022年11月

4）設計図面のサイズは鳥瞰図1092×789㎜、配置図1089×791㎜、平和記念館設計図1099×794㎜で、現在のB1サイズ（1030×728㎜）より一回り大きい。

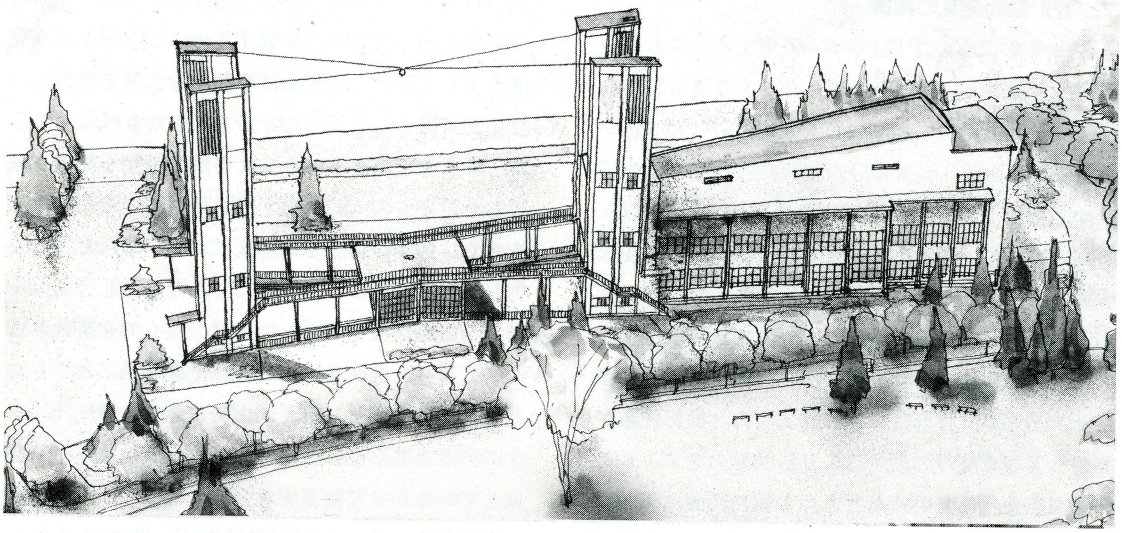


図1　鳥瞰図（図3）の記念館部分の拡大

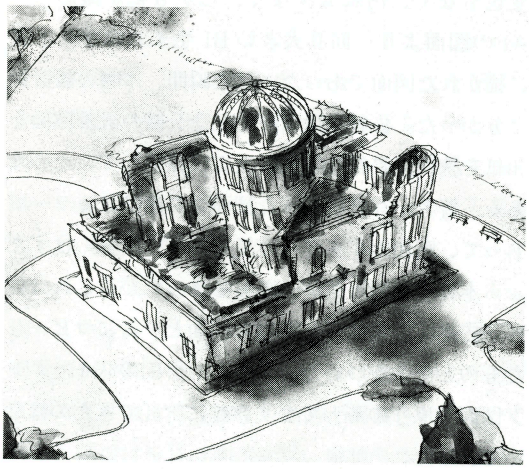


図2　鳥瞰図の県産業奨励館部分の拡大

「民俗建築アーカイブ」の写真・図面をご希望の方は下記のメールに申し込んでください。

「民俗建築アーカイブ㉗」
執筆担当：古川修文
メール：syu-bunkan@jcom.zaq.ne.jp

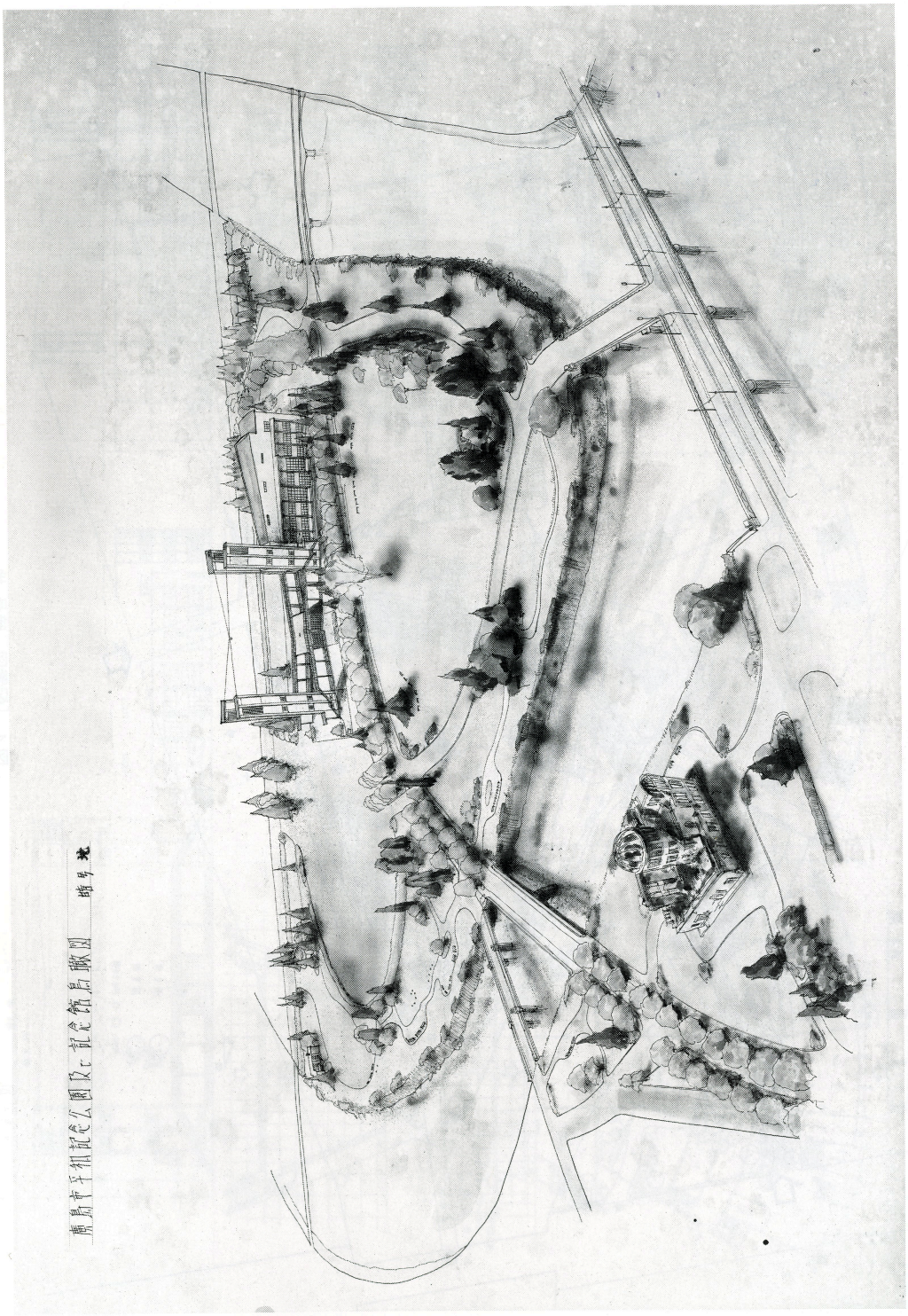


図3　「廣島市平和記念公園及ビ記念館鳥瞰図　暗号　地」（原図は彩色）

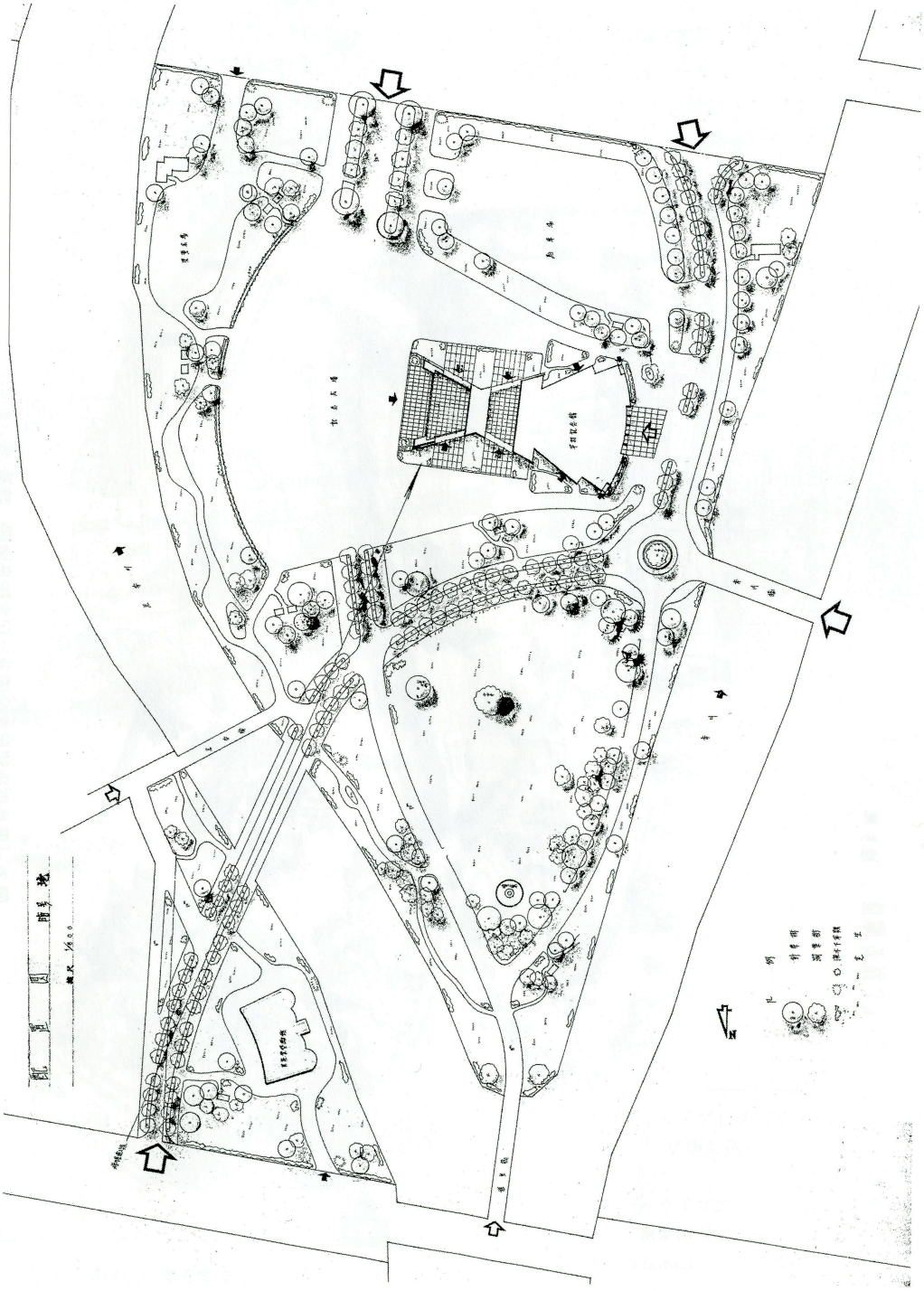


図4「配置図　暗号地」

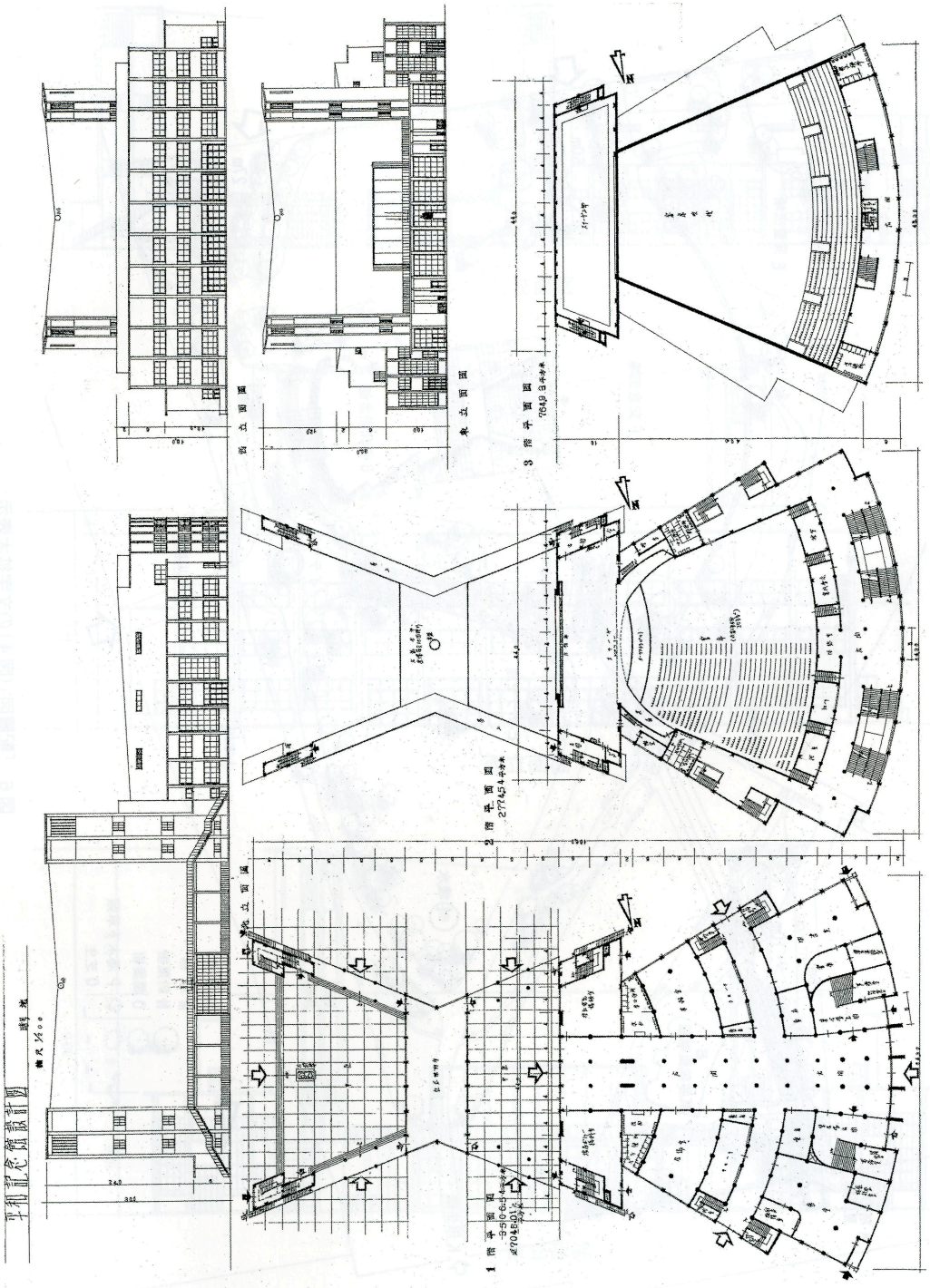


図5「平和記念館設計図　暗号　地」

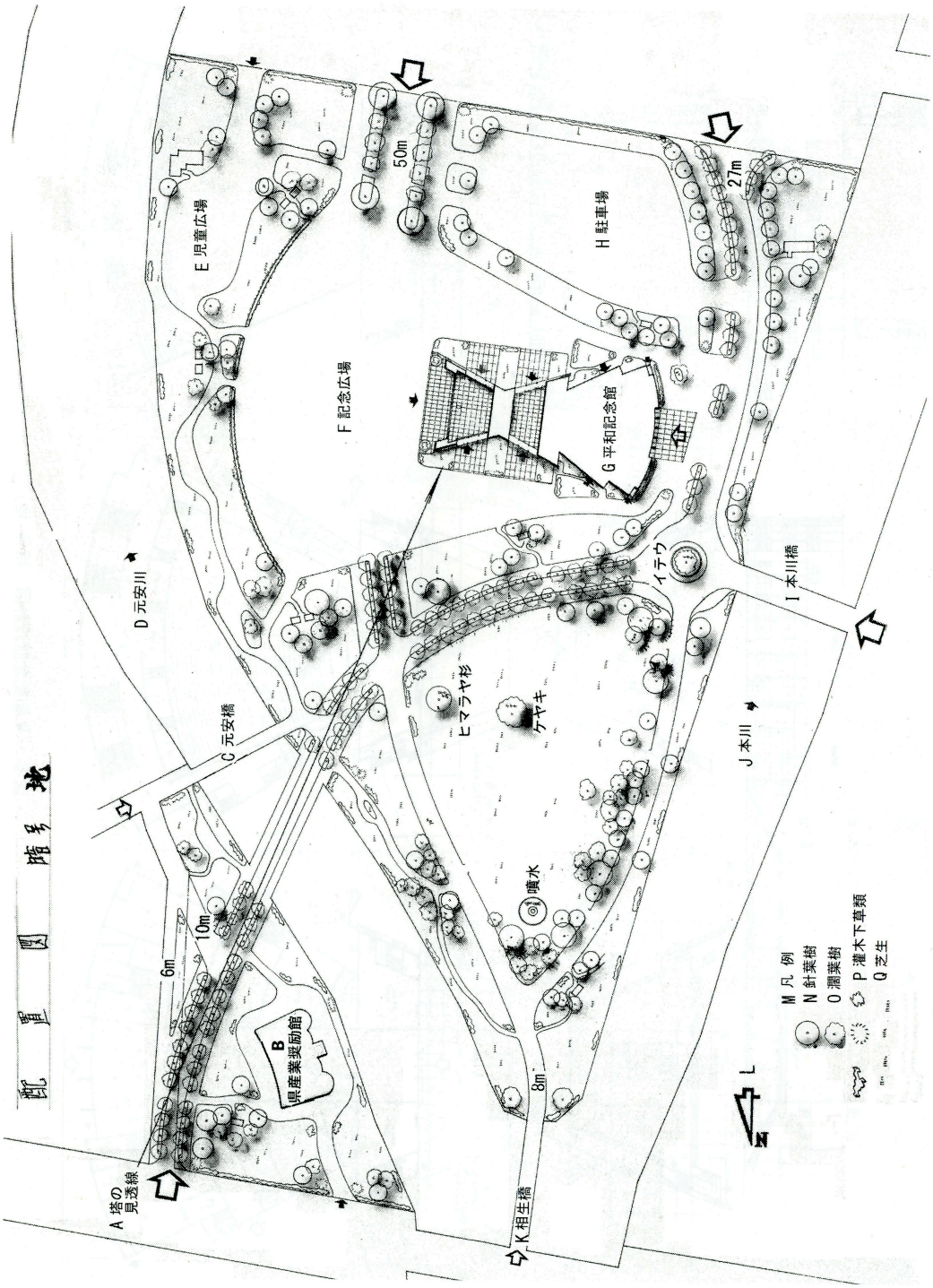
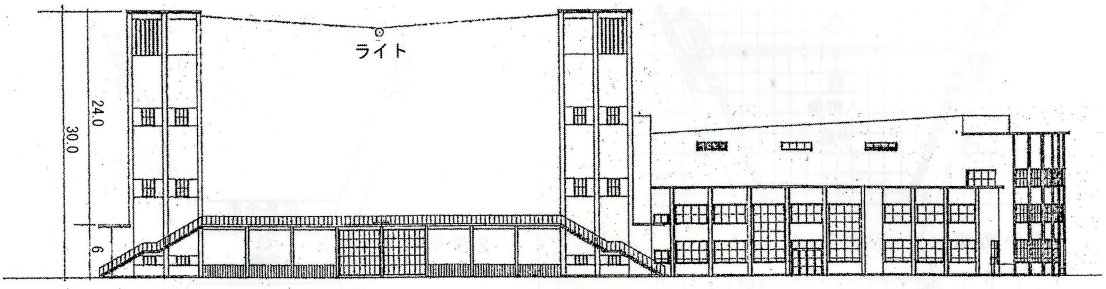
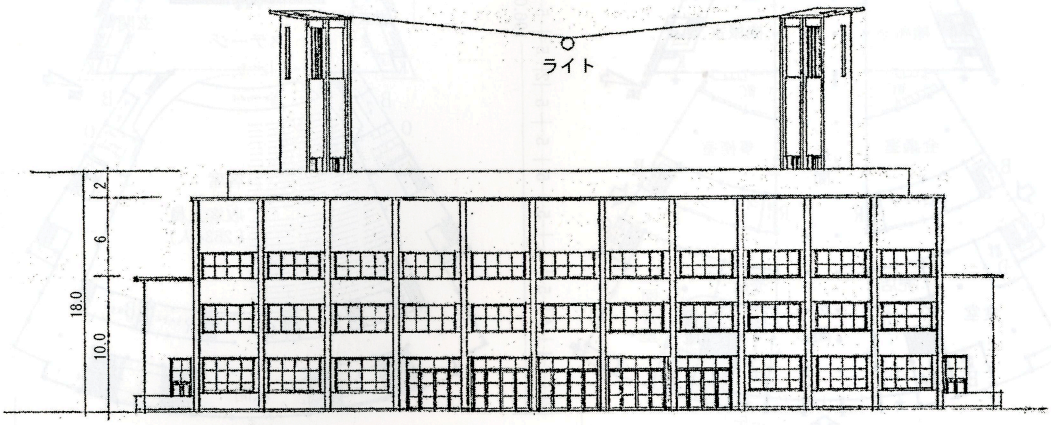


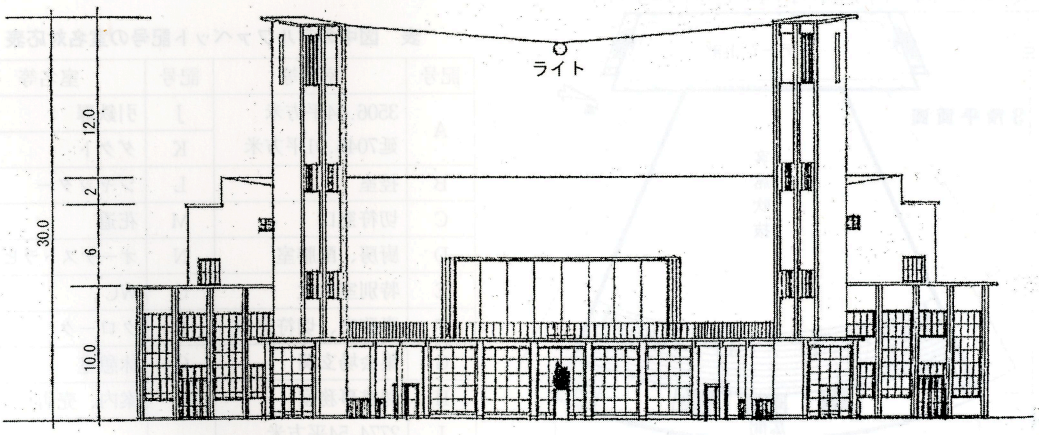
図6　「配置図」(図4)の文字拡大表示



北立面図



西立面図



東立面図

図７「平和記念館設計図」(図５)の立面図拡大

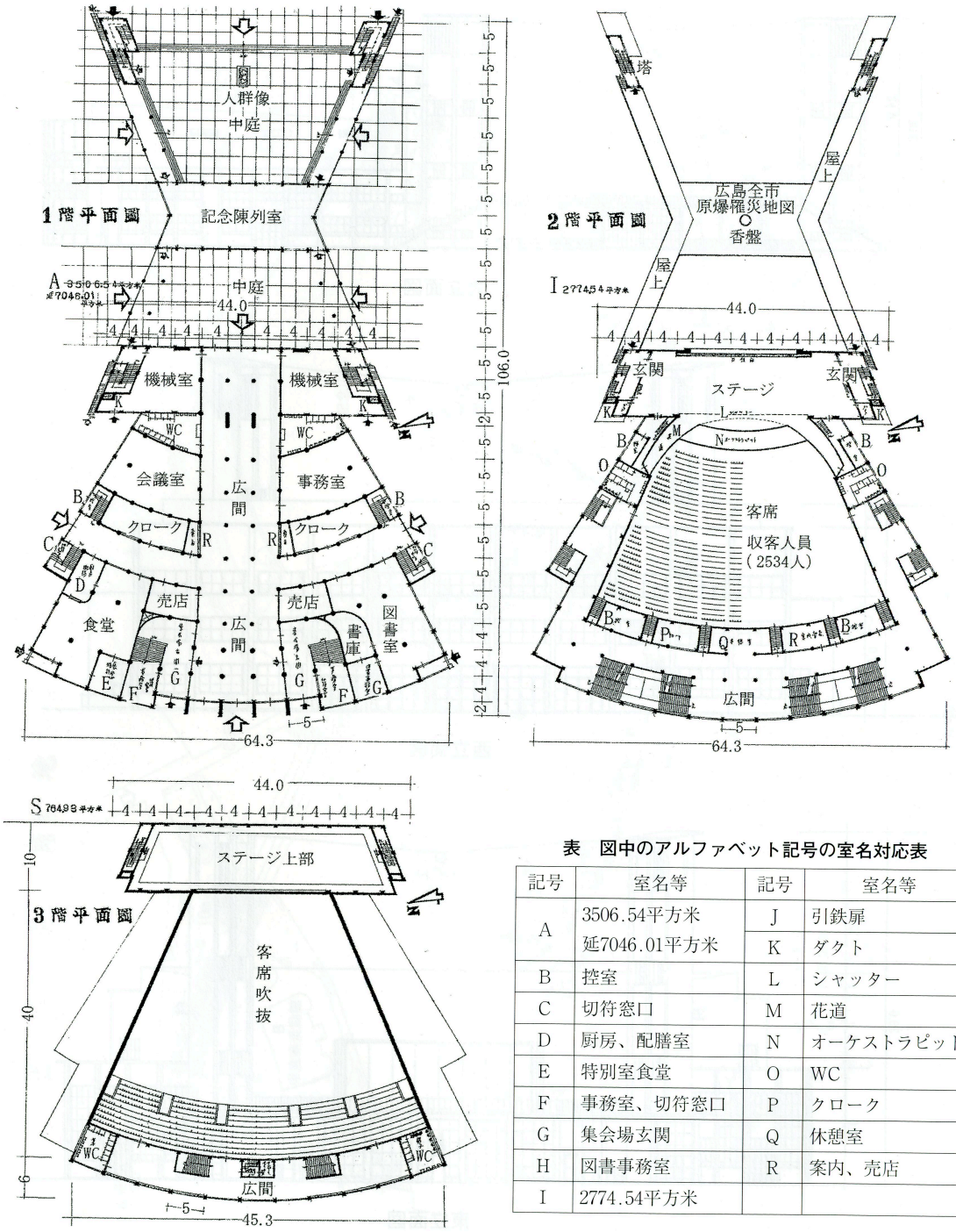


表　図中のアルファベット記号の室名対応表

記号	室名等	記号	室名等
A	3506.54平方米 延7046.01平方米	J	引鉄扉
		K	ダクト
B	控室	L	シャッター
C	切符窓口	M	花道
D	厨房、配膳室	N	オーケストラピット
E	特別室食堂	O	WC
F	事務室、切符窓口	P	クローク
G	集会場玄関	Q	休憩室
H	図書事務室	R	案内、売店
I	2774.54平方米		

図8　「平和記念館設計図」(図5)の平面図拡大